

岡本太郎の御嶽への言及における『何もないこと』について——ハイデガー『形而上学とは何か』を手がかりに

加来裕香(明治大学)

「なんにもないこと——それが逆に厳粛な実体となって私をうちつづけるのだ」(『沖縄文化論』)。久高島のフボー御嶽で「ただ石ころだけが置かれた空地」を目にした岡本太郎はそう言った。

御嶽をめぐる岡本の言説については、主に民俗学的観点から多くの研究がなされているが、それだけでは「石しかない」という事柄の核心には迫りきれないのではないだろうか。拍子抜けするほどの欠如を抱えた〈無〉の空間は、なぜ「厳粛な実体」として迫るのか。この逆説の哲学的内実を問うのが本発表の目的である。

その意味で注目すべき点が二つある。一つは、岡本の語る「何もなさ」が孕む形而上学的問題である。『沖縄文化論』(1961)では、沖縄文化が「爽やかに、無邪気に、形而上的存在に直結している」点が指摘され、『わが世界美術史』(1999)では、日本文化の基層に「〈空〉のキョラカさに賭ける」精神が見出される。「無い／ある」の往還で文化が立ち上がるという見解は、形のなさを積極的に選び取り、形而上学的領野への回路を開こうとする態度と読める。

もう一つは、この問いが極めて日常的かつ具体的な経験から発していることである。岡本が見出した石は特別なものではなく、至る所にある。そんな石にふと目を留める瞬間、私たちは「すでに在るもの」に気づく感度を取り戻し、自らの存在の在処に思い至る。石も私も同じ〈存在〉の点として共鳴し、ありふれた事物を介して無限と自己が重なり合う場が開かれる。そのとき「われわれは不意に、言いようのない親近感をおぼえる。それは生甲斐だからだ」(『沖縄文化論』)。思想家岡本太郎の哲学的意義は、こうした具体的経験に裏打ちされた独自の「生の哲学」を展開した点にあると言えるだろう。

さらに論究を深めるべく本発表では、ハイデガーを補助線とすることで、20世紀哲学の潮流のなかでの岡本の意義を探ることを試みる。というのも、岡本と同時代を生きたハイデガーの哲学は、「なぜ何もないのではなく、何かがあるのか？」という形而上学の根本問題を問いつつ、しかもたえず日常的な経験の中にこの問いの発端と応答の場を求めるものであったからである。ここでは特にハイデガー『形而上学とは何か』における〈無〉をめぐる議論を手がかりとして岡本の「何もなさ」の検証を進め、岡本の御嶽体験とハイデガーの無、両者の接点と差異を明らかにし、空白に現れていたものを問うてみたい。〈無〉を「存在をひらく場」とみるハイデガーの視点に立てば、石しかない空地は単なる欠如ではなく、世界を開示する場であると言えよう。すなわち、そこでは、最小限の「もの」である石が媒介となり、「無／在る」の弁証法的往還が促される。御嶽での無数の石の中から三、四個を「拾ってきただけ」の行為は、一見無作為だが、その恣意性、選択可能性が場を立ち上げ、「無いことの広がり」が強調されることになるのではないだろうか。